

中日春秋

連夜の驚く朗

報である。ノーベル物理学賞に東大名誉教授の小柴昌俊さんが

選ばれば、化学賞は島津製作所研究員の田中耕一さんに決まった▼天下の秀才コースを歩んだ小柴さん。でも規格からはみ出していた。旧制一高での周囲の進路予想は「物理ができないから物理に行かないことは確か」。

東大物理では優がたったの二個でビリ。米留学の推薦状に自分で書いた。

「この男は成績はあまりよくないけれど、それほどばかじゃない」▼旧制高校生は成績など重きを置かず自ら知ることを尊んだというが、そんなロマンチズムを感じさせる従容たる姿勢だ。今も「勉強は能動的にやるもの」と学校秀才を笑う。無論、教科書に頼らない独創力あつての自信だらう

▼それを多くの人が支えた。スーパーカミオカンデの関係者。そして、宇宙からのニュートリノをとらえた光電子増倍管は、小柴さんたっての注目を聞き浜松のメーカーが苦心して作った。数億赤字でも社長は心で「持ってけドロボー」▼七十六歳の小柴さんに対し田中さんは無名の四十三歳で「まさか」の受賞。年齢にも驚くが、企業の研究水準の高さに目を見張る。新薬開発に革命をもたらすタンパク質解析技術が認められた。一昨年の白川英樹さん、去年の野依良治さんと、化学賞の受賞対象は実用性が高く、科学技術立国に大きく貢献するものだ▼小柴さんの研究の方は直接生活に役立つわけではないが「見返りのない基礎研究が進めばいい」と。見返りはある。宇宙の謎解きに挑む学者や支える人の志を教えてもらった。